

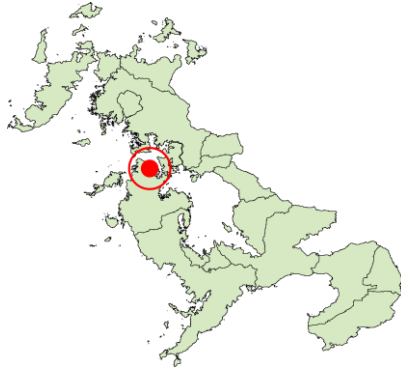
藻場の再生活動に係るさまざまな工夫

瀬川地区海渚を再生する会

瀬川地区について

長崎県西彼杵半島（にしそぎ）の北部にある瀬川地区は西海市にあり、東岸の大村湾と北岸の佐世保湾をつなぐ水域に位置する。

漁業の中心は、カタクチイワシを対象とする地曳網漁であり、漁家の多くが、農業との兼業である。



藻場の現況と組織の設立

当地区の沿岸域は複雑な地形にあり、北部（湾口部）は外海からの早い流れを受けやすい。一方、南部（湾奥部）は複数の入り江が形成され、閉鎖性が強く、水が停滞しやすい環境にある。

このように多様な環境にある沿岸部の岩礁域には、かつてガラモ場が広がっていた。しかし、平成初頭ごろから海藻類が減少し、近年は春藻場が部分的に形成されるだけとなっている。

現在、藻場が回復しない大きな要因は、食害生物（ウニ類）と浮泥堆積による環境の悪化と考えられている。そこで、平成22年度に、漁業者と漁協、そして藻場保全への関心が高い地域住民で組織する「瀬川地区海渚（なぎさ）を再生する会」を設立し、藻場の再生を目指す取組を下記の方針でスタートした。

活動組織

漁業者
漁協

地域住民

県・市

サポート
専門家

サポート

方針① 食害生物（ウニ類）対策

潜水によるウニ類の除去と、その区域へのウニ類の侵入を防ぐ施設「ウニフェンス」を設置し（保護区の設定）、海藻類の繁茂を促す。

方針② 浮泥対策

浮泥が多く堆積する湾奥部の活動区域において、水中ポンプを活用して浮泥を除去し（岩盤清掃）、海藻類の繁茂を促す。

方針③ 海藻の種不足対策

成熟したホンダワラ類の母藻を設置し、種の供給不足を補い、藻場の形成を促す。

藻場再生に係るさまざまな工夫

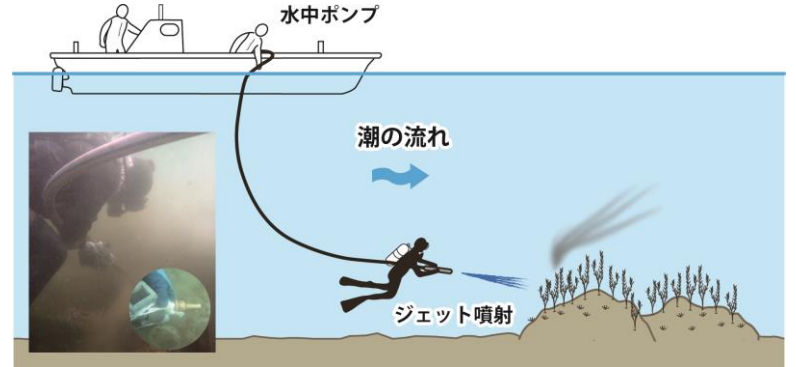
(1) 食害生物（ウニ類）対策

食害生物対策は、「ウニ類の除去」と「ウニフェンスの設置」からなる。ウニ類の除去は、スクーバ潜水で手鉤や金槌でウニを潰す方法で行う。ウニフェンスの設置は、当初は県内で一般的に普及する建て網式の方法を採用していた。しかし、活動区域が、波浪や流れの影響を受けやすく、フェンスが破損・流出するトラブルが続いた。そこで、針金で補強したウニフェンスを製作し、それをワイヤーに取り付け設置する方式を考案し、取組を進めている。



(2) 浮泥対策

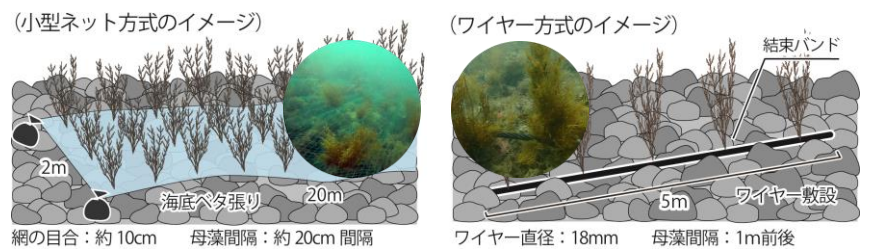
活動を実施する湾奥部の区域は、地形的に浮泥が溜まりやすく、海藻類の種の着底やその後の生長を阻害する。そこで、浮泥の流入が少ない冬季に、水中ポンプを使用して、海底に堆積した浮泥を除去している（下図参照）。



(3) 海藻の種不足対策

衰退したガラモ場における種の供給不足を解消するために、成熟したホンダワラ類の母藻を設置する取組を進めている。

活動当初は、母藻を束ねて網袋に入れ、それを延縄方式で海底に設置していた。しかし、錘となる土嚢を複数設置することから、労力的に課題であった。そこで、サポート専門家に相談し、園芸用の網（大きさ約1m×20mを2枚つなぎ合わせた網、目合約10cm）に母藻をからめ海底に敷設する「小型ネット方式」が提案され、導入することにした。この方法は、海底に網を直接敷設するので少量の土嚢で設置でき、労力の軽減につながっている。また、造船場の廃ワイヤー（直径18mm）に結束バンドで母藻を縛り、土嚢を付けずに敷設する簡易で安価な方法も考案し、現在、取組を進めている。



活動の成果と今後の方針

当地区の藻場は、マメタワラ主体のガラモ場で、これを維持・回復するのが、当会の目標である。活動エリアにおける直近6ヶ年の大型海藻の平均被度は、40%前後で増減を繰り返しながら推移した。また、平成30年以降に緩やかな減少傾向がうかがえたが、令和3年度に回復し、今後の被度の増加が期待される。

現在、新たな試みとして、潮の流れが速い湾口部の環境に適応するアカモクの母藻設置を行っており、その分布域が緩やかに拡大している。今後も、こうした新たな取り組みをサポート専門家と一緒に試行しながら、藻場の維持回復を図っていきたい。

